

平成27年度 関西大学博物館実習

雑誌名	関西大学博物館紀要
巻	22
ページ	63-116
発行年	2016-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/11172

平成27年度 博物館実習報告

— 受講生のレポートから —

博物館実習で学んだこと

文13-190 金澤 仁美

はじめに

この一年間、博物館実習の授業を通して様々なことを学び、多くの人との出会いがあった。私は遠方から通学しているため帰宅の時間の関係で大学に入学して以来、一度もクラブサークルや部活動といった団体に所属したことが無い。1、2回生の時は1人で授業を受け、授業が終わるとすぐさま帰宅するという毎日であった。毎日好きなことが学べるのは嬉しかったが、友達と共に授業を受けたり、休み時間に楽しそうに何かのミーティングをしている人たちを見ると羨ましく思えた。その時、私は大学で友達と言える人は片手で数えられるほどであり、非常に狭いコミュニティの中で過ごしていることに気付いた。せっかくこのような様々な団体があるマンモス校に通っているのだから、どこかの団体に属し、志を共にする人たちと何かを作り上げたいと思ったのである。そんな時、博物館実習の存在を知った。以前から博物館には興味があり美術館に行くのが趣味であったため、ここなら1年間を通して深い学びと多くの出会いがあるだろうと思い、急いで受講に必要な科目を履修したのである。今回のレポートでは、1年間授業を受ける中で、学芸員としてはもちろんのこと、社会人として生きていく中で決して忘れてはいけないと思ったことと、実習展のグループ活動と反省点を主に述べていこうと思う。

博物館実習について

初回のオリエンテーションでは、1年間お世話になる大勢の先生方から学芸員の心構えを教えていただいた。その中で、最も強調されていたのは「礼儀」であった。この実習では目上の人や学外の人と関わるが多く、また、実習展ではそういった人たちから貴重な資料を借用した。この実習を受講したことで、礼状の書き方や借用物としての資料の扱い方など、普通の講義授業では学ぶことが出来ないであろう社会人としての礼儀作法を身に着けることが出来た。来年から就職活動が始まる3年時にこの経験が出来たことは非常に貴重であり、これからの人生に役立てていきたいと思う。

オリエンテーションで、ある先生が、学問の根本は「死んだ人（モノ）とどう向き合うか」とおっしゃったことを覚えている。私はここでも「礼儀」が重要なのではないかと思った。例えば、

先人が残してきたある一つのモノに対する様々な研究。それらを著名な研究者の名前や普遍的な事実だけを通して見ていて新しい発見はあるだろうか。その研究に対して一つ一つ敬意を持って真剣に向き合えば新たな発見があるかもしれない。これまで目を向けられなかった、埋もれてしまった研究にも目を向け、掘り起こそうとする態度が先人に対する「礼儀」であり、そうして行われた研究によってそのモノに資料としての「価値」がつけられると思う。そしてこれを職業とするのが学芸員であるということが、オリエンテーションを通じて感じたことである。

展示をする際には「見てもらいたいものを展示する」のではなく「展示を来館者にどのように受け止めてもらいたいのか」「社会や個人にどのような影響があるか」を考えるようにとご教授をいただいた。この時私は、珍しく貴重な資料が展示されていることに驕ってはいけなさと感じた。展覧会は来館者が資料から学びを得る機会である。ここでは学芸員は資料と共にこれまでの研究成果を展示することで、来館者の学びをより充実したものにする必要がある。河内國平先生は「技の伝承とモノの伝承のバランスが大事」だとおっしゃり、最近の教育は技の伝承に重点が置かれバランスがとれていないと嘆いておられた。日本に限って考えると様々な技術は代々受け継がれ、現代でも多くの職人が存在していることを私たちは知っている。しかし、私たちが現代の職人が作ったモノを実際に見たことははたして何回あるだろうか。時代が経るにつれ、実際に使用されることが無くなり、技だけが伝承されるようになった日本の伝統工芸。当初の目的で使用されることがなくなった現代の刀剣作品などの伝承は、モノの伝承に直接的に関わる学芸員の課題の1つでもあると思われる。資料として歴史的価値の少ない現代の工芸品は学芸員の扱い方（展示をするならその展示方法）によって人々はそれらの価値を認識することになるだろう。したがってそれらの伝承の如何は学芸員の扱い方にかかっているといても過言ではないと私は思う。このように河内先生の授業では、現代作品の伝承はこれまで行われてきた古物の伝承と同様に重要であるということを学んだ。

実習展について

私たちの班は実習展までの毎週火曜日5限に班会議を行っていた。毎週授業以外で顔を合わせることで親睦を深めると共に気兼ねなく話が出来た関係になったので、この会議を続けて良かったと思う。ここでは各班員の担当作業と進捗状況の報告、今後のスケジュールの確認などを行った。班員のなかには授業や部活動で毎週の会議に来られない人もいたので、会議の内容はその日中にグループLINEに挙げることで文章として残すことにした。また、金曜の授業後は全員が揃うので特に重要な決め事をする際や火曜会議に欠席した班員にその内容を伝える際などに会議を行った。さらに私はこれに加え、班での活動をした日は一言日誌を書いた。私たちの班は当初、他班よりも早め早めに動いていたので借用、写真撮影までは順調に事が進んでいた。班長が夏休みから資料返却までのスケジュールカレンダーを作ってくれたので、計画を立て予定を全員で共有もした。しかし、そう簡単にはいかず、後半に行くにつれて計画通りにはいかなくなっていた。このことも考慮に入れ、班内での締め切りは余裕を持ったものにしてはいたが、それでもギリギリや間に合わなかったことが数回あったのである。いくら計画を立ててそれを共有していても、1人でもいいかげんなことをする人がいれば、すべての予定が狂ってくるということをグループ活動に慣れていない私はこの時身をもって知った。私は特に言われた訳ではないが、副班長的な

役割になり各班員の担当作業を手伝ったり、アドバイスをしたり、会議場所の確保などを行った。班員と個人的に連絡をよくとっていると、次第にその人の性格が見えてきた。時間にルーズな人、期限を守らない人など、グループ内にいる時には分からないところが見えてきたのである。実際に、約束の時間に遅れて来たり、提出期限が間に合わなかったことがあった。会議や東京実習でせっかく距離が縮まったにも関わらず、私はそういった班員に面と向かって注意することが出来なかった。言えば今後の実習展の準備期間が気まづくなると思ったからである。しかし、ここで私が注意をしなかったことが大きな計画の乱れの原因になったのではないかと反省している。

図録制作の遅れが実習展準備期間にまで響き、展示室の準備が急ごしらえ的になってしまったのである。図録担当者が各班員の原稿を受け取り、語調を整えその後全員で誤字脱字チェックをする予定だったが、何故かその工程がされず、提出日の2日前あたりから誤字脱字がひどく、文章表現もおかしいところが多数あることに気付き、展示室準備と並行してすべてやり直すことになった。私はいつ全員でチェックをするのかと図録担当者に何度も聞いていたが、言われた日になると他の案件の話になったりまだ構成が途中だと言われたり、結局全員でチェックする機会が設けられなかった。ここで私が一言「絶対全員でチェックしないとダメだ」と強く言っていれば、すべてやり直す必要はなかったのではないかと思う。図録に加え、展示準備期間には大パネルの誤字脱字にも気付き、その修正も同時に行わなければならなかった。修正は再提出の期限に間に合わず、私はパネル担当者と放課後遅くまで一緒に残り、作業を手伝った。何度も誤字脱字のチェックをしたが、2人の目だけではすべてを見つけることが出来なかった。

このような失敗は決して図録、パネル担当者だけが原因ではない。班員全員の責任である。私たちの班は本音で話し合うことが出来ていなかった。また、今、誰がどのような作業をしているのかということは毎週の会議で全員が知っているが、ただ知るだけで終わっていたのではないかと思う。全員が初めての経験である博物館実習、その作業のすべてを全員が経験するのは難しく、資料の借用や各種書類の作成など担当者だけが経験することも多々あった。その際にどういう作業だったか、何が難しかったか、注意する点はどこであったかという事後報告を全くしていなかったことに実習展が終わった今振り返ってみて気が付いた。その時は自分も初めてのことで担当になった作業に必死で、メンバーのサポートをしても何に困っているかを直接聞いたことはなかった。また、私たちの班にはIllustratorやPhotoshopなど専門的な知識を持っている人がおらず、ポスター、パネル、画像処理にはかなり苦戦した。このことは班結成時から分っていたことだったので、デザイン系の作業はもっと余裕を持った計画にする必要があったと思う。

終わりに

実習展の準備中、複数の先生から全く異なった指導を受け、困惑したことがある。どの先生に従ったらいいのだろうと初めはメンバーと悩んでいたが、次第に、従うという考え方がまずいということに気が付いた。それ以降は、先生方のアドバイスを持ち帰り、班で話し合い、その中で自分たちがベストだと思った方法を取り入れるようにした。時には先生方のアドバイスより自分たちの考えを通したこともあった。そのことにより成功したと思うこともあれば、失敗したと思うこともあった。失敗したと思うことは大概が資料の見栄えに注意したところで、来館者への配慮が疎かになっている点だったのである。

この実習で私は、相手の気持ちを考える事、気配りの重要性を改めて実感した。展示や班の活動でミスが出るのはいつもこの当たり前の考え方が出来ていなかった時であった。先生方が口をそろえておっしゃっていた社会人としての礼儀は子どもの頃から言われていた相手の気持ちを考えることの延長に存在していた。この実習で学んだ大切な初心を忘れず、これから社会に出る準備をしていきたいと思う。

この度、関西大学博物館実習を履修し、一年間の学芸員課程の様々な講義を受講したこと、また東京研修を始めとした多くの博物館への見学の機会を得たことは、自分にとって非常に意義深い経験と成った。特に、当実習の最大の山場である博物館実習展では一班の班長として、約半年間にわたってグループをけん引し、企画したプロジェクトを完遂できたことは、今までの自分の人生の中でも特に大きな成果である。今回、自身の博物館課程での一年を振り返り、総括としてのレポートを執筆する上で、グループリーダーとしての展示運営の経験を基に、グループリーダーが備えるべき能力を論じることは一定の意義があると考えて、企画を率いる立場の人間の資質を自分なりに分析する。

まず、私がこの一年間で、企画を率いる立場に求められる力だと強く感じたのが、「コミュニケーション能力」である。かなり大雑把な言い方ではあるが、グループのリーダーとしての役割を考えた時、この能力が、リーダーの資質を最も包括的に言い当てていると感じた。グループリーダーの役割として考えられるのは、まずグループを一致団結させ、共通の目標に向かっての意識を共有させるモチベーターの役割、次にグループ内の活動や対外交渉において、グループの代表として一歩前に立ち対応する責任者の役割、そしてグループ内や他の班の活動状況を常に把握・統率し適切な指示を与えていく管理者の役割である。そしてどの役割においても、グループ内の誰よりも頻繁に、密度の高いコミュニケーションを継続しなければならない。

はじめに、モチベーターとコミュニケーション能力について考える。あかり班の場合、私が6月19日の班編成において班長になったわけだが、その時点では私のグループ内での立場は消去法の班長といった模様であり、私自身も他に立候補者が居ない状況で仕方なく、という具合だった。私はこの時、すでにあかり班の中で、他の誰かがモチベーターになるのは難しいということを感じており、経緯はどうあれ、班長となった自分がしっかりけん引しなければならない必要性を自覚した。そこで、この日の講義が終了したあと、すぐに第一回班内会議の場を設け、改めて自己紹介をしてもらった。あかり班のメンバーはやや偏っており、班内の多数が日本史・文化遺産学専修に所属する学生である。しかも内5人は同じ専修ゼミの所属となっている。ある程度顔の知れたメンバーが多いため、班活動は初期からコミュニケーションに困ることは無かったが、気心の知れたメンバーと一緒に行動しようとする分、全員が初対面であるよりも班内の分裂が早く、そして深く起こる可能性があった。米田先生等から、前年度の博物館実習にて内部分裂を起こしたグループがあり、実習終了まで泥沼の様相を呈していたということは繰り返し聞かされていた。そこで私は、班長であるよりも、進行役に徹して回転効率をあげることを終始意識していた。加えてメンバーにはお互いに仲良くすること、「前例」のようになるのは決していけないことを常に呼びかけた。最初は予想通り、会議の途中で一人が携帯電話を触り始めてしまったり、右と左で全く違う議題が進行していたりという様子だったが、なるべく全員均等に発言を促し、メンバー間の中継役としての会話の間を取り持つ間に、グループのまとまりが増してきたことを実感でき

た。少人数の班活動など、規模が限られたグループ内でこうしたリーダーシップを取ることはある程度慣れていて、かつて部活動で主将を務めたり、道場に通っていた少林寺拳法で多くの人と触れ合いながら稽古をした経験がこの場に生きたように思う。

一方で自分の力不足を感じた場面もあった。9月中旬、それまでの展示計画には無理があることが分りはじめたため、企画展の路線変更を決断した時だ。企画展に取り上げる年代を江戸期から昭和期までに拡大することを決めると、これまであまり深く参加してこなかったメンバーの一人が非常に協力的になった。その後、二人で夕食を食べた際に、そのメンバーは企画展の年代が広がったことで自分の専修研究や趣味嗜好と噛みあうようになり、やる気が湧いてきたということ話をしてくれた。それまで彼自身の研究分野や趣味の範囲を考慮したことは無かった。メンバーの持つポテンシャルを封殺したまま無理のある展示企画を推し進めていたことに気づき、班員それぞれを深く見る目線がリーダーの自分に欠けていたことに大きなショックを受けた瞬間だった。モチベーターとしての役割を果たす際に必要なのは、単に会話の間に立つことができるというだけでなく、メンバーそれぞれの持つ人物像を理解し、彼らの興味関心を企画の方に向けたうえで一方向に東ねて推進力に昇華する、深い観察力と統率力である。そしてそのどちらにも、メンバーとの密なコミュニケーションが欠かせない。これがリーダーの資質の一つ目である。

次に見るのが責任者とコミュニケーション能力の側面を考える。これは、この一年で最も自分に欠けていると痛感した部分でもある。グループリーダーという立場にある以上、企画展に向けての作業、対外交渉、資料の借用と運搬、展示、すべの面においてグループ活動の責任の一端を背負う。先方には必ず代表者の名前を知らせるし、自身の印鑑も用いて署名する。だが私はこの役割を些か甘く考えていたことを否定出来ない。私が考えるに、責任者として重要な能力は、自分とグループ全体の活動について慎重に吟味する注意力、自分の意思決定に自信を持って貫き通す意志力、そしてそれらを把握した上で先方にこちらの意向を誤解なく伝える伝達力である。私には、正直そのどれもが充分でなかった。責任者たる自分の意思決定、行動が遅れたためにグループ全体の行動を遅延させ、ギリギリになっての企画変更を強制してしまった。また注意力不足と連絡の不徹底から重要な書類を何度も再提出し、先方の方々に迷惑を掛けた。挙句の果てにいざ班の企画について現状を整理した上でプレゼンをしようとしても言葉が出てこない、という有り様だった。コミュニケーション能力と言っても、あくまで関西大学、正確にはもっと狭い関西大学博物館実習というコミュニティの中に所属している学生同士でのコミュニケーションと、大学の内外を問わず、一つの集団を率いるリーダーとして社会に接していくためのコミュニケーションはまた異なる。今後、大学を卒業して社会人となった時により重要になるのはもちろん後者のほうだ。社会人のコミュニケーションの特徴は、自分と相手、双方が抱えているものの大きさゆえに、小さなやり取りが互いの人生をも左右するという点だ。このことに社会に出てから気づいたのでは遅すぎる。しかし、頭では分かっているつもりでいても、自分が学生身分という「殻」に守られている感覚から抜け出せなければ、蔑ろにすべきでない部分まで後手に回ってしまう。ここから脱却するために必要なのは、自ら社会人として他者と接する経験をして、できれば失敗することだ。たとえグループ内でのやり取りでも、自分に任されている仕事の重大さを真摯に受け止め、相手のことを考えたコミュニケーションを行う。もちろん最初からすべてが上手くいくわけではないし、多方面に迷惑をかけたり、あるいは先方からお叱りを受けたりすることもある

だろう。しかし失敗を経験することで、自分に課せられているものの重みがはっきりと感じられるようになる。同時に、相手もまた同じく大きな責任を背負っていることがわかる。ここに他者を尊重し良好な人間関係を生み出そうとする意識が芽生えるのであり、それこそが責任者としてのコミュニケーション能力の芽生えではないだろうか。

最後に、管理者としてのコミュニケーション能力を考える。こちらのグループ内部への諸連絡はもちろん、他班のリーダーと連絡を取り合い、博物館実習全体を俯瞰して状況を確認していくことも含まれる。自分自身を振り返ると、これに関しては優秀な他3班の班長に大いに助けってもらったといわざるを得ない。班編成が行われた直後から、他の班長は連絡を取り合い、お互いの情報を共有して実習展全体を良いものにしようと模索していた。自分はただそれに付いていくことしかできなかったが、プロジェクト全体のことを考えて協力し合う、そうした姿勢がすでに備わっている3人には感服するばかりで、非常に勉強になった。彼らに備わっているのは、自分がプロジェクトを引っ張っているという責任感、絶対に成功させたいというモチベーション、そして実習展全体のバランスを考え、決して自分の班の企画だけを押し通すのではなく、他班との協力姿勢をとりながら実習展全体の方向性を考えることのできる客観的な視点である。実習展全体のことが見えているからこそ、お互いの抱えている企画の重みや、問題の大きさを推し量ることができるし、責任者としての立場を理解し、尊重しあえる。ここに社会的な人間関係が生まれる。私もこの3人と会議を重ねるうちに、自分の班の企画ばかりに行きがちだった目線が、企画全体を見渡すことのできる目線に変わっていったように感じる。管理者として必要なのは、このように自分の仕事だけでなくプロジェクト全体を俯瞰したうえで他者との関係を調整していくことのできる柔軟な協調性だ。

実習展が始まった時点で私が備えていたコミュニケーション能力は、せいぜい誰とでもおしゃべりできる、といった程度のもので、そこに自分自身に対する責任感や、実習展全体を背負っていかうとする協調性は無かった。この一年間で、自分が一つのプロジェクトを背負い、責任をもって人々と接していくことの難しさ、大切さを体感することができた。博物館実習を通じ、グループリーダーとして、ひいては社会人としての資質を学んだこの経験を忘れず、社会を率いる一人の大人として生きていきたい。

1. はじめに

関西大学の博物館実習の最大の特長であり、学芸員資格取得に向けて大きな意味を持つのが、実習生主体で行う実習展だ。これまでの講義や実習で得た知識や経験をもとにして、実際に博物館展示を作ることは、展示がいかにして作られるか、来館者はどういう反応を示すかを知るためにとっても重要である。

ここではこの実習展について、展示作業を通して得た知識や課題について述べていく。

2. 展示概要

実習展において私はB班に属しており、「地獄」をテーマとした展示を制作した。当初は「大阪城の怪談」というテーマの案もあったのだが、展示品が揃わないと考えられたため廃案となった。「地獄」の案に関しては、班員が受講している講義の担当教員である小栗栖健治先生が資料を貸して下さる事が分かり、班全体の意見としても「地獄」なら様々な展示が作れそうだという結論に至ったため、この案がテーマとして決定したのである。会議を重ね、最終的なコンセプトとしては「日本人の文化に地獄がどう影響を与えてきたかを味わう」というものになった。展示品には『往生要集』や「熊野観心十界曼荼羅」、「変成王像」、「大経五悪図絵」、「幻灯の種板」、『鬼灯の冷徹』などを用い、地獄に関する資料や創作物を、時代を追って紹介していく形とした。

3. 実習展に向けて

展示コンセプトが固まると、実習展に向けての展示作業計画を組み、調査や資料の借用などの作業を進めていくことになる。資料の借用先や関連施設への調査に班員数名で赴き、展示の具体性をより高めていった。そして展示品が揃い、展示作業を続けていく中で、安全上の問題から当初目指していた展示方法が叶わない展示品もあったのは残念である。しかし、出来る限り安全な方法でよりよい展示を作るためにはどうしたらよいかを班員で考えつつ作業ができたのは、これからの社会生活でも役立てていきたい経験である。

また、展示を構成する上で大きな役割を果たしたのが、2015年9月10日から9月12日にかけての東京都下宿泊研修である。これまでの博物館見学の経験ももちろんだが、この研修は展示作業がいよいよ本格的に進む中で行われたものであり、今まさに私たちがなすべき事を来館者・構成者双方の目線で見学して学ぶことができたのは非常に刺激的な経験となった。展示動線やコンセプト、来館者の様子、キャプション、解説の様子など、見学したどの館も参考にしたい部分が多かった。特に自由見学先として私たちが訪れた東京藝術大学大学美術館では「うらめしや〜、冥途のみやげ展」が開催されており、死後の世界をテーマとした展示は自分の班の展示のテーマと共通する部分があるため、どのように展示品を見せるかがとても参考になった。

4. 課題

2015年11月8日から2015年11月13日までの実習展期間、またそれまでの準備期間で見えてきた課題は主に五つある。

まず一つ目は、展示作業計画である。6月に実習展を行う班を編成してすぐ、私たちの班は週一度以上、班で会議を行っていた。この際、私自身は部活動の関係があり、春学期間は班での会議に一部参加できなかった日もあったのだが、会議後に会議内容を班のメンバーで共有していた。夏季休業中や秋学期間も会議内容はグループで共有するようにしてきたため、その点はこれからも活かしていきたい点だと考えている。しかし展示作業を進めていく中で、個人に振り分けられた仕事の進捗状況についての報告やその変更点などに関しては班全体への連絡が行き届かないこともあった。そのため個人の担当展示以外の展示作業の状況が把握できず、後手になっての報告もあり、私自身も報告に甘い部分があったため、この点については反省しなければならない。そして計画に沿って作業を進めていったが、作業が進むにつれて計画に齟齬が生まれ、重なっていった事で、計画を組み直しても実習展開始日目前まで展示作業を続けるという結果になってしまった。本来、学芸員として展示を組み立てる際は、遅くとも展示開始日の一週間前までには全ての作業を終了させておかなければならないので、今回のような結果にならないよう、より余裕をもって展示計画を立て、臨機応変に迅速に行動していかなければならないという事を学んだ。また、班で会議を行った他にも、今年度は各班の班長同士で班長会議を行い、四班が互いの進捗状況を把握して情報共有をした。講評にもあったように、全体としてまとまった展示を組み立てられたのは、この班長会議の結果が活かされていると考えられる。

次に二つ目は、展示のコンセプトの甘さである。私たちはテーマを「地獄」とし、地獄が日本人の思想や文化にどのような影響を与えてきたかを探ることをコンセプトとしたが、今回の展示ではそのコンセプトを感じられないとの講評があった。改めて展示を見直してみた結果、「地獄」が取り上げられた資料を淡々と並べてあるだけで、キャプションにもその資料の説明しか記しておらず、「地獄」思想が根付いてきた要因であろう人々の意識についての言及がないことに気付いた。展示を構成している段階では展示品を揃え、展示品同士のつながりが分かるように配置することに考え方の重点を置いてしまったことが原因であると考えられる。ここにコンセプトの考え方の甘さが見えたので、これから学芸員になって展示を組み立てる機会を持った際は、資料の成立背景といったさらに深い部分まで探求し、来館者の心に訴えかけることができるような展示を作ることが課題だ。

三つ目は、展示動線の組み方である。私たちの班の展示の動線は、基本的には資料を年代の古い順から並べ、現代の資料へつなげていくという形をとっていた。しかし実際に来館者の動線を見ると、他班の展示もまとめて大型ケースから先に見たり、解説員に尋ねたりと様々で、当初想定していた動線の通りには足を運んでいない事が分かった。したがって、展示品自体は個々で見ても問題がなく、動線を変えてもコンセプトにさほど影響を及ぼさなかったため、より自然な流れになるよう動線を変更することがあった。展示室自体が他班との合同である事を除き、動線が分かりづらくなってしまった理由として考えられるのは、展示スペース中央の行灯ケースに展示した変成王像である。変成王像はポスターに用いたこともあり、人目を引くためこの展示の目玉ともいえたのだが、中央に配置したことにより、来館者が両側の覗きケースと大型ケースをどう

見るべきか分からなくなったと考えられる。しかしその反面、像を360度一周してじっくり見てもらう事も可能となったため、メリットとデメリットが介在している事に動線の組み方の困難さを感じた。

四つ目は、実習展開始後の展示の工夫である。展示開始後から「キャプションの文字が小さい」という指摘を受けたため、キャプションの文字を拡大して作成し直した。しかしそれでも文字が小さかったようで、さらに文字が明朝体であるのは読みづらい人もいるという指摘もあり、事前確認の甘さが課題として残った。今後は様々な立場の人の目線で展示を見直すようにしていく事が求められる。

五つ目は、来館者への声掛けである。展示を見ている来館者に展示解説を行うことも学芸員の役割の一つであるが、この声掛けにも課題があると感じた。今回の実習展で、私たちの班は全体的にあまり積極的には来館者に声掛けをせず、来館者から求められたら解説をするというように動いていた。その理由としては、展示品をじっくり見ているときに話しかけられると、自分の見たいペースで展示を見ることができなくなってしまう、という考え方があったからである。私もこれまで見学した博物館で、展示品を見ていると解説の方に声を掛けられ説明を受けていると、なかなか次の展示品を見ることができなくなる場面があった。しかし博物館によっては学芸員からの積極的な声掛けを行っていない場合も見受けられる。来館者の中には流し見程度で良いという方や時間制限のある方もおり、そのため実習展では求められるまではあまり声を掛けずにいよう、という考え方に至ったのである。そして実習展を迎え、解説員として展示室にいと、何度か解説を求められ、説明をする事もあったが、流し見をしていく方や、展示品一つ一つのキャプションを読みながら進む来館者が多かった。しかし開催期間中に展示を見に来てくれた知人に解説員からの声掛けの事を尋ねると、「質問があればこちらから聞くので、あまり話しかけてほしくない」という意見と、「色々な事を知りたいので解説をしてもらえると嬉しい」という両方の意見があり、この時声掛けの難しさを実感した。したがって、来館者の負担にならないような声掛けを行うのは簡単な事ではなく、来館者の様子を伺いながらニーズに対応できるようにすることも一つの課題である。

5. おわりに

今回の博物館実習展を通して、これらのような多くの課題が見えてきた。どの課題も来館者に寄り添った展示を作るためには必ず解決しなければならないものである。しかし課題が見えると同時に、来館者の方から「よく勉強している」「学生でありながら本格的な展示だ」というような言葉をいただけたことも事実である。

周囲の人々と協力すること、情報共有を徹底すること、計画性を持つこと、臨機応変に対応すること、仲間内だけでなく第三者の声を聞くことなどは、学芸員でなくとも、社会生活で必要となることばかりである。今回の実習展を通じて学んだように、自分自身の課題を真摯に受け取って改善していく姿勢を保ち、社会生活における様々な場面で、この経験を活かしていきたい。

博物館実習を振り返って

文履15-20 坂本 恵子

1. はじめに

私は平成9年に大阪大学法学部を卒業し、民間の生命保険会社に入社して以来、主に保険契約に係る法務関係の業務に17年間携わってきた。大学において法学を専攻し、卒業後も法務関係の業務を担当してきたが、もともと中学生の頃から美術館や博物館を巡るのが大好きであった。そして、大学時代においては、法学部に在籍しながら、学芸員の資格取得を試みたものの、在籍する学部の関係もあり、必須科目等の履修が叶わず、断念した経緯がある。

社会人になってからも、博物館等に度々足を運んでいたが、三人の子の出産・育児によりここ数年、足が遠のいていた。しかしながら、一昨年、長年勤めてきた上記の会社を退職したことをきっかけに、再び大学で学び、大学時代に断念した学芸員の資格取得を目指したいと考えようになった。そこで、ホームページを検索して、見つけたのが関西大学の学芸員コースであり、幸いにも科目等履修生として履修を許可していただけた。

従来ずっと心に温めていた憧れの学芸員に係る授業は、どれも有意義であり、まさに私が学習したいと思っていた内容であった。その中でも博物館実習において、特に印象に残った「授業及び博物館等施設見学」並びに「実習展」について、以下にて、この1年を振り返りながら記述したいと思う。

2. 授業及び博物館等施設見学の振り返り

まず、博物館実習の授業は、文字通り、全般的に実践的な内容が多く、実際に手にとって資料に触ることができた授業（考古資料の取扱等）においては、資料を大事に扱うことの大切さを痛感するとともに、授業とはいえ、毎回とても緊張した。中でも、刀剣の取扱の授業については、日本を代表する刀匠であるにも関わらずとても気さくな河内國平先生の人柄に私はすっかり魅了されてしまった。座学の中では、「折り紙つき」「札つき」「元の鞘におさまる」などの「刀から出た言葉」について、刀自体が日常で使われなくなった現代においても、言葉として日本の文化の中に根付いているということが実感できた。その後、実際に刀の手入れを体験したが、手に持った刀は、竹刀や木刀などとは全く異なり、ずっしりと重かった。そして、最後に河内先生がおっしゃった「たった一日しか会わなくても人生で影響を受ける人がいる」、「将来どんな綺麗な水で泳いでいくかが重要。泥水の中ではだめである」という言葉がとても印象に残っている。

次に、主に日曜日に行われた博物館等施設見学であるが、後に触れる東京実習を除いては、「元興寺文化財研究所保存科学センター」の見学が最も印象に残っている。その理由は、木製品・金属製品・伝世資料等を実際に保存・修復されている現場を目の前で見学できたからである。職員方が凄まじい集中力で保存・修復のきめ細やかな作業をされていた姿に感動した。遺物などの資料が博物館等で展示されるに至るまでの途中経過を目の当たりにすることができ、貴重な文化財が学芸員等の研究者だけではなく、いろいろな人々の努力によって、現在に残されているのだと

ということが実感できた。

3. 実習展の振り返り

実習展については、平成27年6月下旬（以下、平成27年の出来事については年号の記載を省略）から約5か月間にわたり、班員で協力しながら企画・運営を行ってきた。時系列で振り返って、反省点やそれを踏まえた提言等を以下にて記述する。

(1) 班決めとテーマ案選定（6月下旬から8月中）

土曜日に博物館実習を受けている私たち2組は、6月20日に先生方から東京実習の説明を受けるとともに、実習展の班及びテーマ案を決めるよう指導を受けた。このとき想定外だったのが、前日の金曜日に受講している1組（3年生）から数名を受け入れたうえで班決めをしないといけなかったことである。この場では班もテーマ案も決まらず、これ以降7月初旬にかけて、複数回授業外で班決めのための打合せを行うこととなった。最終的には、2つのテーマ案「秋彩」及び「旅人のすがた」のいずれに属したいかによって、班を分けることとなった。私は「旅人のすがた」班（以下、「旅班」という）に属することになったが、旅班は、年齢、在籍（出身）学部・学科もバラエティーに富む15人の大所帯の班となった。このような状況であったため、旅班ではその後も授業外で度々打合せの機会を設け、また、8月中旬においては、実習展のテーマと関連する『連れもて行こら紀州から！—世界にひろがる和歌山移民—』展（和歌山県国際交流センター）を有志で見学するなど、班員の交流を深める努力をするとともに、実習展に向けて出来るだけ前倒しで準備を進めていった。

(2) 東京実習（9月初旬）

東京実習では、全員見学となっていた博物館以外については、主に実習展のテーマである「旅」に関わる見学先を班で話し合って選定した。具体的な見学先は、1日目は「東京国立博物館」、「ふじみやび風呂敷ギャラリー」（または「アド・ミュージアム」）、2日目は「江戸東京博物館」、「国立西洋美術館」（または「日本郵船歴史博物館」）、「JICA 海外移住資料館」、3日目は「世界のカバン博物館」、「国立科学博物館」であり、かなりのハードスケジュールであった。しかし、いずれの館も展示内容はすばらしく見応えがあり、特に、私は実習展で「江戸時代」を担当した関係上、「江戸東京博物館」の旅の道具に関する展示の方法や解説・キャプションの配置等はかなり参考になった。また、「JICA 海外移住資料館」では、事前に予約し学芸員の方に解説していただけたため、展示内容をより深く知ることができ、また、展示解説の勉強にもなった。余談ではあるが、「JICA 海外移住資料館」では、9月11日において私たちが来場者数40万人目であったため、記念式典にも参加でき、これも良い思い出となった。

(3) 実習展に向けての具体的な準備（9月中旬から11月初旬）

東京実習を終えると、あっという間に9月中旬を過ぎ、企画案提出・ポスター原稿作成等の締切が次々に迫ってきた。出来る限り、スケジュールを前倒しで準備してきたつもりであったが、ポスター原稿・図録の作成については、班長や図録担当者に締切直前に多大な負担を強いること

となり、最大の反省点であると考えている。

企画案作成後はその内容に従い、班員の中で担当する時代（江戸時代、明治・大正時代、戦前の昭和時代、戦後の昭和時代）を割り振りし、また、1人1点以上の担当資料を決め、各自解説を作成することとした。先に述べたとおり、私は時代としては「江戸時代」、資料としては「印籠」「矢立」「枕」「煙管」「土人形」を担当した。この中の資料については、個人蔵のものもあり、実際に借用先まで足を運んで調書を取るとともに、梱包したうえ借用・返却するという資料借用に係る一連の流れを実際に経験することができた。

また、併せて、私は資料の解説文全般のとりまとめも担当したが、後に編集しやすいように、予め字数を決め、年号・数字・文体・接続詞等は統一したうえで各自解説文を作成してもらうようにした。それでも各自が作成した解説文には個性があり、本来の意味を変えずに文章の平仄を合わせるのなかなか困難だった。最終的には、声を出して読み上げ複数人で再査するなど、適切かつ分かりやすい解説になるよう努めた。

いよいよ資料が揃ってからは、班員全員で解説パネルやキャプションを作成し、展示に取り組んだ。旅班は展示資料が多く、資料とのバランスを考慮してキャプションは少し小さめに作成したが、先生方からはキャプションが小さすぎるという事前のご指摘があったため、老眼鏡やルーペを準備するなどの対応も行った。

(4) 実習展期間中（11月初旬から中旬）

実習展期間中は各日の午前・午後でシフトを組んで、班員全員が概ね2回以上シフトに入った。また、全員が展示解説できるように各自準備した。私自身、来館者の観覧の妨げにならないように配慮しながら、出来るだけ積極的に声掛けを行い、展示解説を実践した。

(5) 実習展終了後の講評等（11月中旬から下旬）

実習展終了後の講評については、先生方のどんな辛口批評が飛び交うかと内心ビクビクしていたが、旅班については、予想どおり「キャプションが小さい」等のご指摘があったものの、概ね「よい内容だった」「よく頑張った」などの好意的なご意見が多かったと受けとめている。旅班においては、作業負担の濃淡はあったものの、班員にいわゆるフリーライダーは存在せず、班員全員が協力して頑張ったからこのような評価をいただけたと考えている。

(6) 実習展を振り返っての反省点とそれを踏まえた提言等

上記のとおり、実習展については、旅班全員の協力のもと、概ね成功であったと私は考えているが、以下の2点については、反省点であり今後の課題であると考えている。

まず1点目については、班決めとテーマ案選定について混迷した点である。来年の実習生に対しては、初回の授業で、6月下旬頃までに班及びテーマ案を決めなければならないことと併せて、1組（金曜日）と2組（土曜日）の混成での班編成もありうることを説明いただけたらと思う。

次に2点目については、締切直前のポスター・図録担当者の負荷が大きくなってしまった点である。スケジュールの立て方が甘かったことがその理由の1つとして挙げられるが、これについては、各班に実習展の経験者である大学院生などをアドバイザーとして配置する等は考えられな

いだろうか。実習生の自主性を重んじることは大切ではあるものの、すべてが初めての経験であり、よき相談者としてのアドバイザーがいればより円滑に実習展に臨むことができると考える。また、ポスター・図録については、必然的に「Illustrator」「Photoshop」等のソフトを扱える班員が担当することになるが、昨今の博物館においては学芸員も扱うことが多いと聞いている。写真撮影やパネル解説作成の授業と同様に、これらのソフトに関する実践的な授業を取り入れていただけたらと思う。そうすることで、全員がポスター・図録作成に関われるようになり、また、実際に学芸員になったときにも役立つと考える。

4. 終わりに

博物館実習を受け始めた当初は、1年間無事履修することができるか、年齢層の異なる他の実習生とうまくやっていけるか等、不安でいっぱいであったが、それは全くの杞憂であり、実習を通じて、多くのことを学ぶとともに、非常に充実した1年間を過ごすことができた。このような1年を過ごせたことについて、指導いただいた先生方及び博物館事務室のスタッフの方々、共に学んだ実習生の皆さんにとっても感謝しており、この場をお借りしてお礼申し上げたい。

そして、博物館実習で学んだことを糧に、今後博物館に係る仕事に就けるようさらに努力を重ねていきたいと思う。

以 上

これからの博物館・美術館に求められること

文履15-22 舟越 寿尚

日本各地には国公立・私立に関わらず、数多くの博物館や美術館、またそれに相当する施設が存在している。しかしながら一部の施設を除いて、来館者数は減少傾向とのことである。併せて地方公共団体の財政悪化などもあり、指定管理者制度の導入、施設や展示物の更新も順調に進まないなど、多くの館園で運営状況は大変厳しいものだと聞き及んでいる。入館者数の増減は、施設の運営や存続に最も大きく関わることであるので、この状況を脱するためには、まずは来館者数を増やし、またリピーターとなってもらうことに取り組まなければならない。

来館者を増やすための魅力的な展示や企画の開催。言うまでも無く、今日日この館でも試行錯誤を繰り返しながら、最重要課題として取り組んでいることであるが、具体的にどう取り組めば良いのか、またどのように取り組めば頭一つ抜きん出たものになるのであろうか。学芸員道を歩み始めた掛け出しながら、博物館実習での施設見学などで、特に博物館を訪れて考えさせられたことは、旧来の固定観念に捕らわれすぎてはいないか、ということである。博物館とはこういうものであるべきだ、美術館とはこういうものでなければならない、というようなある種のプライドや固定観念が、自ら人々を遠ざけているのでは無いだろうか。特に登録博物館や博物館相当施設に、そのような傾向があるように感じた。

むろん、博物館や美術館は収蔵品などの展示だけでなく、それらを使った調査や研究活動を行う研究機関という役割も有していて、そこで働く言わば研究者たる学芸員に、高度な専門知識が要されることは当然のことである。博物館法に準じた扱いをうける館園であれば、ことさらである。しかし、それが館園や学芸員の独りよがりになってはいないか、世間や来館者がどのようなものを望んでいるのか、常に多方面にアンテナを張り巡らせながら行動しなければならないであろう。その点、博物館類似施設は、博物館法の適用外だからこそ自由に動け、いち早く来館者の最新のニーズをキャッチし、登録博物館や博物館相当施設に勝るとも劣らない魅力的な企画を行い、一定の入館者数を集めている人気の館園も見られる。

ただし、博物館や美術館の運営には、入館料では賄えないほどの莫大な費用を要するため、来館者数が増えたからといって、即座に、主に財政面での運営状況が改善されるといった単純な話ではない。しかしながら、入館料では賄い切れない運営費を公費から補填しているからこそ、世間からの風当たり、すなわち入館者や市民のエバリュエーションやニーズへの対応は、直接的に館園の運営に関係してくるだろう。館蔵品や文化財は共有の財産であるという意識、入館者ひとりひとりが公費負担者であることも肝に銘じ、何ひとつ不都合を感じず来館いただき、喜んで帰っていただけよう、心がけなければならない。特に、負のイメージは一度ついてしまうと、取り戻すには多大な時間や労力を要する。

そのためには、展示や館蔵品だけでなく、施設や館園の周囲にも目を向けなければならない。アクセスの案内は適切であるか。敷地内や館内の清掃状況は行き届いているか。特に美術館に当てはまることであるが、非日常空間を演出できているか。分業体制ができていて、たくさんの方

スタッフが働いている館園であればあるほど、学芸員や職員ひとりひとりがこれらを心がけなければならぬ。例えば、とある美術館へ個人的に見学に行った際の事であるが、障がい者の方がアクセスするためのスロープに、太い木の枝が落ちている事があった。ほんの些細な事であるかもしれないが、スロープを走行する車椅子やベビーカーの妨げになるかもしれないし、つまづいて転倒する方もおられるかもしれない。これは私の仕事ではない。誰かが対応するだろう。そのような意識は廃さなければ、博物館や美術館がこれからも継続的に、市民に目を向けてもらうことは難しいだろう。場の雰囲気作りも含め、これらの点が徹底的に行き届いているのが、ディズニーランドである。

これからの博物館や美術館の競争相手は、テーマパークや映画館などの娯楽施設であると私は感じている。その事をいち早く感じているのが博物館類似施設ではないだろうか。博物館や美術館が単なるテーマパーク的な娯楽施設になってはいけないが、テーマパークとは違った知的な娯楽を知ってもらうことは、知的水準や教育水準の向上、社会教育の推進、さらには長期的に見ると文化や芸術の発展にもつながるのである。そのために博物館や美術館は、なりふり構ってられないところまで来ていると、私は危機感を感じている。

私事ではあるが、2016年4月より、『大森 海苔のふるさと館』を管理運営する団体、『NPO法人 海苔のふるさと会』の職員として働くことが決まっている。同館は2008年に開館、東京都湾の品川から羽田にかけ、かつて地場産業であった海苔生産を後世へ伝える為、地域と連携しながら活動を行っている博物館類似施設である。その活動の一部を挙げると、海苔の漁労具の展示、展示資料を用いた教育普及活動、大田区立郷土博物館との共催によるまち歩き、元生産者の方と協働での海苔つけ体験、浜辺の生き物探検隊や海苔と浜辺のガイドツアー（生き物観察会）、昔遊び、絵本の読み聞かせ、市民ボランティアとの屋上ガーデンの植え替えなど、多岐に渡っている。

大森 海苔のふるさと館は、入館者数が年間8万人から9万人を維持していて、毎年、前年度を上回る入館者を集めている。小学校の校外学習、つまり教育的利用が最も多く、同館の展示の主な機能も教育普及活動に集約されている。館藏品は約900点あるが、これらを用いた調査・研究活動は行われていない。今後も展示資料や施設の大幅な更新は予定されておらず、いかにして継続的に来館者数を現状維持、またさらに増加させてゆくかが、中長期的な課題になってくるだろう。むろん先述の通り、公共性を有する施設の運営状況や活動評価は、来館者数や利用者数だけで図れるものではない。しかし、運営に公費が投入されている以上、費用対効果の指標となり、ひいては運営業務受託者の評価にもつながる。

私は同館で、来館者数を増加、維持するため、まずは来館者（受益対象者）のすそ野を広げることに挑戦したいと考えている。教育普及事業や体験学習など既存の活動を深めるのは当然とし、自主事業により、団体や各種学校のエクスカージョン先としての活用、地元食品メーカーや学校との協働による食育事業、幅広い年齢層が楽しめるまち歩きの開催など、検討してみたい。そのほか、従来とは違った広報活動や情報発信（若者向けの雑誌とのタイアップなど。）など、とにかく幅広い年齢層に興味を持って足を運んでもらえるような、斬新で総括的なアウトリーチ活動をプロモーションできることが、これからの学芸員をはじめとする博物館の運営に携わる者が、果たすべき重要な任務であり、役割であると私は捉えている。

併せて、地域における連携の希薄化や脆弱化が危惧される中、住民に愛され、気軽に訪れてい

ただき、創造的な連携や交流が生まれるような施設づくりにも努めてゆきたい。社会教育施設である博物館や美術館は、館園のスタッフと来館者の繋がりをつくるだけでなく、来館者同士の繋がりも生まれるような場であること。教科書や教室で学ばなくとも、館園に展示されている資料から学び、学芸員はもちろんのこと、来館者同士でも学びや教えが行われる場。それが私の理想とする博物館である。

先日、図書館司書が『学校が死ぬほどつらい子は図書館へいらっしゃい。』とツイッターで呼びかけた。このことには賛否両論あるだろうが、私は博物館や美術館も同様の機能を持っていると信じている。そのような子どもが来館した場合の対応についても、スタッフ全員で検討を重ねておかなければならない。分業体制の下、私はそのような担当ではないから……などとは言っていないであらう。

私は学生生活を通し、「グローバルに考え、ローカルに学ぶ。」をポリシーとしてきた。『大森海苔のふるさと館』での勤務にあたり、当地に地の利の無い私は、第二の故郷とすべく、まずはひたむきに大森や大田区に関して広く学ばなければならない。地域から学び教わる機会が多々あるだろう。このポリシーを今後も貫きながら、地域社会に恩返しすべく、貢献してゆきたい所存である。

はじめに

博物館実習の最後の授業で、多くの先生方が学芸員としての「人との接し方」について触れられた。相手の前で資料を取り扱う時のスタンダード、お作法・礼儀、そして自分が大事だと思っていることを人に説明できるようになること、自分の思いがちゃんと相手に伝わるような能力など、先生たちはご自身の経験を踏まえながら、様々な面から「人との接し方」を語られた。資料が主体として人に見せる博物館であるのに、学芸員にとって大事なものは「人とのつながり」、「人との接し方」である。このことはきっと博物館実習の授業を学んでからはじめて体得するようになるであろう。今回のレポートは実習で学んだことの中、あらためて感じた学芸員としての「人との接し方」について述べたい。

1、授業を通して

博物館実習の授業は、昆虫の標本作りから始まり、資料の取り扱い、古文書の裏打ち、のりパネの制作、刀剣の取り扱い、茶室でのお作法、拓本の取り方など、実際に初めての体験はたくさんあった。それらの授業ではものの取り扱い方だけでなく、それぞれを担当する先生方はご自身の「人との接し方」も教えられた。なかでも、佃先生からの「人に話かけられることを待つ学芸員は失格」という言葉が印象深い。先生は茶室で、床の間に飾っている掛軸や主人に出された茶器をいかに鑑賞し、そしてその鑑賞を通して茶室という場でいかに主人と会話をするべきかについて説明された時に、この言葉を語られた。しかし、それは要するに相手より先に話せばいいというわけではなく、茶室に招待された時に、そこにある飾り物などから主人の趣味を判断し、共有できるような話を発しないといけないということである。そして、それは茶室内だけのことでなく、たとえば、学芸員として資料を借用しに訪問する時、先方の興味がありそうな会話を展開させてはじめて、先方とのつながりが深まり、信用されることにもつながる。すなわち、こちらから投げても相手がキャッチできるような話題を出せない学芸員は失格であり、話題を引きだしたとしても続けさせることができない学芸員も失格ということであろう。そうなるには、鋭い観察力と膨大な知識が備わらなければならない。学芸員の仕事への認識はこの言葉でより理解できたと考えるが、何よりも学芸員にとって大事な「人との接し方」の実態をより確実に捉えることができた。

2、博物館見学を通して

実習の授業を受ける前にもたくさんの博物館等の施設に行ったが、それらは主に興味のある美術に関する展覧会、特に企画展や特別展のためであった。実習の授業では今まで行ったのと異なっていて、自然観察や街歩き、そして琵琶湖博物館、江戸東京博物館、国立科学博物館など様々な特色のある博物館等施設に行き、様々な異なったタイプの展示を観ることもできた。なかでも、東

京実習の時に国立近代美術館で見た展覧会が非常に印象に残っている。それは「No Museum, No Life?—これからの美術館事典」という展覧会で、美術館に関する事項をAからZまでの36のキーワードにそって、作品にはじまり、美術館の資金や設備、災難時の美術館、そして学芸員の活動、集まってくる観覧者など、ほぼ美術館そのものを見せる展示である。また、学芸員がこの展覧会を設計した時のメモや打ち合わせの資料、そして作品の展示位置を決めるために使われた模型まで展示され、実習展の前に見ることができたので、非常に役に立った。36のキーワードの中、最も感銘したのは最後のZが代表するZeroである。展覧会が終われば、作品が皆もとの箱に入り、収蔵庫に眠るようになって美術館がゼロになるというような解説が書かれている。ゼロの解説ははっきりとはされてなく、今回の展覧会が終われば、次回の展覧会がまたゼロから始まる、あるいは全く同じ展覧会はもうなくなるといった意味として様々に捉えることができると思われるが、展覧会、つまり展示がなければ、資料は単なる箱に入った資料になり、人々に伝えるメッセージがないとも捉えることができる。この意味では、すなわち、資料は人に見せることによってはじめて意味をもつことになり、人々に様々なメッセージを伝えるようになる。それをいかに人々に資料を見せ、いかに伝えるかが学芸員の仕事である。それは学芸員としての「人との接し方」のある側面の表しだと言え、こうした展覧会からも「人との接し方」とは何かを体得した。

3、実習展「秋彩 紅葉と落葉の色めぐり」(以下「秋彩」)展

筆者は研究テーマである「秋草の美学」が「秋彩」に近いというわけで、土曜組の中から出たテーマの「旅人のすがた」と「秋彩」の中「秋彩」を選んだ。今回の実習展で、展示設計、資料調査、作品借用、そして解説の執筆を分担した。四回生、大学院生、社会人からなる班とはいえ、意思疎通のことに関しては、先生方からの忠告もあり、毎週授業後の打ち合わせはほぼ全員が出席した。有能なリーダーとメンバーたちがいて、作業も日程に沿って着実に進み、ミスなどの確認も再三に行われ、余裕をもたせて展覧会の開催を迎えることができたといえる。

(1) 「秋彩」展の良かった点

「秋彩」展のよかった点として、まず、学芸員の仕事からいえば、先述したように、早めの行動で、破綻を避けることができた。最も挙げられるのは予備案があることである。つまり、展示設計の段階で、借用する予定となった資料に関しては問題が発生する場合の予備案が想定されている。実際、本来風景画を展示する予定であった第五ケースの資料は借用が問題となり予備案の陶磁器に替えることができた。

そして、展示自体からいえば、全面に美術作品を中心としてきれいに収まっていて、色をメインにした展示というものもあるが、色と作品の解説、字の大きさと字数などを含めた意味で、分かりやすい展示であるといえる。実際のアンケート結果からみて、見やすさは特に評価されている。そして、全体的に展示のコンセプトである秋の色の移り変わりが伝わっているといえる。

(2) 「秋彩」展の問題点

「秋彩」展の問題点として、まず動線の問題が挙げられる。第五ケースと第二ケースが隣接しているため、多くの観覧者は第五ケースを見てから第三ケースと第四ケースを見ることになる。ただ今回の場合、そういう風な動線の乱れは予想外のいい効果になったようであるが、しかし、本来設計した動線のとおりに見てもらえないことが否めない。それはケースの配置や他班との妥協

などやむを得ないところもあるが、根本になる原因はやはり最初の展示設計の段階でケースの状況に合わせた上での動線を設計していなかったことだと言える。一方、動線が乱れて逆に良い効果になったということは本来の動線が不適切で、すなわち、設計した動線よりも理想的な展開のしかたがあったはずということが考えられる。

そして、動線の問題にもつながっているが、アンケートには特に上がらなかった問題で、講評の時に先生方に指摘されたことの中で、色見本を配置する意味が不明であることと第五ケースの意図が不明であることが挙げられる。ただ、それらの問題は先生方もおっしゃったように、完全に理解不可能というわけでもなく、展示のコンセプトや理念を説明すれば納得がいくことである。すなわち、説明不足による理解の欠如ということである。言い換えれば、要するに、自分たちの思いが相手に伝わっていないということであろう。林先生が授業でおっしゃったように、学芸員の最大の課題は自分の目と他人の目を同時にもつことである。それは林先生なりの「人との接し方」に対する解釈でもあろう。説明不足の問題を解決するに要求される観覧者の目はやはり学芸員としての「人との接し方」の問題とつながる。

おわりに

美術が好きであるから、美術品の取り扱いなど、そして美術品を展示する博物館や美術館のことについて勉強したい、という単純な理由で、博物館に関する授業を受けたが、学芸員を職業にしようとする発想には遠かった。その上、「学ぶことももちろん多いけど実習は大変だよ」と周りの先輩たちの「忠告」、そして外国人の自分が日本で資格をとる必要はどこにあるか、という逃げ口上で、博物館実習の授業を取るか取らないかについて、自分の中では随分闘争していた。結局のところは、苦勞して勉強する分、いつかはためになるだろうと思いながら、実習の授業をとった。しかし、今考えてみれば、その時の決断は、本当によかった。日々博士論文の執筆に追われた中、月に一回の博物館見学や毎週テーマ別の授業は最大の楽しみであった。もちろんそれだけでなく、上述したように、学芸員の仕事に対する認識が深まり、様々な面から大事とされる「人との接し方」を体得できた。そして、何よりも、考えたことのなかった学芸員が自分にとって現実になっている。